

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	発達支援さくらボBERG		
○保護者評価実施期間	R7年12月1日		～ R8年1月31日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	37	(回答者数) 28
○従業者評価実施期間	R7年11月1日		～ R7年12月31日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数) 4
○事業者向け自己評価表作成日	R8年2月1日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	子供にとって、自宅に次ぐ第2の居場所として、安心・信頼できる施設であること。	自ずとだいたいと言ってもらえるようにアットホームな雰囲気や心をかけており、穏やかな空気感の中で困り感・ヘルプサインが出せるよう意識している。また限られた部屋スペースだが、部屋毎に目的をもたせていて、1つの活動に集中出来る環境を整えている。	引き続き、安心できるスペースづくりに努め、子供が自分の意思で行動ができ、かつ選択力を養えるよう支援プログラムを検討していきたい。
2	職員それぞれの経験や資格を活かして、より子供の特性や個性を考慮した支援計画と支援プログラムの立案が強みである。職員間で話し合う機会をしっかりとる事で職員間のコミュニケーションを図りやすくし、同じ方向性をもって療育ができるようにしている。	研修の積極的な実施や、受講助成により、職員の質の向上に努めている。無資格の場合でも仕事継続のモチベーションになるように資格取得を支援している。法人ネットワークを活用し、専門的なアドバイスが得られる体制を整えている。	今後も現場職員と管理者・児童発達支援管理責任者がコミュニケーションをしっかりと図ることで連携し、ワンチームで支援が行えるようにしていきたい。また、作業療法士、理学療法士、言語聴覚士などの専門的な配置により療育プログラムを充実させていきたい。
3	子供や本人を取り巻く環境を意識して、関係機関や保護者との連携を重要視している。	保護者に対して、子供の様子をしっかりと伝え、必要な情報提供を行っている。必要に応じて定期的な面談以外にも相談に応じたり、家庭訪問や電話での相談を受け付け、保護者の不安や困りごとに寄り添える体制をつくっている。	保護者同士の交流、きょうだい児への支援も考慮した機会を提供していきたい。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	地域との連携の強化が必要である。	外部機関と繋がる体制づくりの時間の確保が難しい。	地域のイベントに参加するだけでなく事業所発信での行事を企画し、インクルーシブな地域社会作りに貢献していきたい。
2	完全に周囲の音を遮断できるような個別スペースがほとんどない。	基準人員以上配置をしており、手狭に感じられることある。また下校時間が重なっており一度に利用する子供の数が急激に増えている。	自己通所の子供の利用時間の調整や支援プログラムの見直しにより部屋や時間を分散化できるようにしたい。
3	HPやブログ、SNSを活用した事業所活動の公表が必要である。	個別の活動報告はSNS上でおこなっているが、技術的な課題から定期的なブログの更新が難しくなった。	HP等を有効利用し、次年度はSNSを活用した情報発信を定期的に行えるような体制を整えている。